

「メレクザーラ」 解題

鈴木 満

〔お断り〕

初出である鈴木満訳・注・解題「メレクザーラ」(『人文学会雑誌』第三十八卷第三号、平成十九年一月)では紙数の関係で極めて簡単な解題を附したに過ぎなかった。今改める。今年十月出版予定の『メレクザーラ——ドイツ人の民話』(国書刊行会。武蔵大学研究出版助成対象)所載の「メレクザーラ」には、前者の解題ではなく、こちらを収録する。

解題

〔一〕

近東^{レヴァント}関係の参考文献では、スウェーデンの植物学者フレードリク・ハッセルクヴィストの旅行記〔訳注参照〕の他に、フランスの植物学者・旅行家ジョゼフ・ピットン・ド・トゥルヌフォール(一六五八—一七〇八)の『王命により行われた近東旅行見聞録』^{レヴァント}(一七一一)も用いられたか。これは一七七六年ドイツ語に翻訳された。〔ド・〕ト

ウルヌフォールについてムゼーウスは「奪われた^{ヴェル}面紗」の原注で言及している。

さて、ムゼーウスがこの物語の素材に用いたのは、彼の故郷であるテューリンゲンの言い伝えて、ドイツ語圏ばかりかフランスなどでも人に知られており、中世以降数数の小説・戯曲に編まれているグライヒェン伯爵の冒険譚^{アヴァンチュール}、テューリンゲンの名高い聖女エリーザベトに纏わる、これまた西欧に広く知られている伝説、それからザクセン公ハインリヒ獅子公^{デーレウエ}を主題にした民衆本^{フォルクスブーフ}といつたあんばい。

第二、第三の素材については本文と訳注で述べ尽くされているから、ここでは煩瑣な繰り返しを慎む。

〔二〕

ここに紹介するのは、グリム兄弟編『ドイツの伝説』(一八一六／一八・二卷)五八一番「グライヒェン伯爵」⁽³⁾の訳である。⁽⁴⁾

「グライヒェン伯爵」

サギタリウス『グライヒェンの物語』⁽⁵⁾第一卷。五章。

パウリ・ヨヴィイ(ゲツツエ)『しゅぐあるつぶるく年代記』⁽⁶⁾

テンツェル『月例報告』⁽⁷⁾一六九六年。五九九―六二〇ページ。

メリサンテス『山城』⁽⁸⁾二〇―三一ページ。

グライヒェン伯爵ルートヴィヒは一二二七年不信の輩^{やから}との戦に出征したが、捕われて奴隷に落とされた。身分を隠していたので、彼は他の奴隷同様極めて過酷な労働に従事しなければならなかった。そのうち遂に何事にまれ彼が

特別巧みで、身ごなしが優美だったので、王(スルケン⁹)の美しい息女の目に触れた。そこで姫の心は恋に燃え立った。ともに虜囚(とりこ)となっていた伯爵の従者からその身分を聞き知った彼女は、何年もの間彼と親しく交わったあと、もし自分と結婚しようというなら、彼を自由にし、莫大な宝物を与えよう、と約束した。ルートヴィヒ伯爵は故郷に奥方と二人の子どもを残していた。しかし自由への渴望が勝利を占め、彼は教皇と今の妻の承認をなんとか得られるだろう、と思いい、姫の申し出を全て受諾した。その後彼らは無事に逃亡を果たし、キリスト教徒の地に辿り着いた。そして教皇は、麗しい異教徒の女性が洗礼を受けたので、結婚の請願を聴き入れた。両人はテューリンゲンに向かい、そこに一二四九年に到着した。二人の妻たちが初めて出逢ったグライヒエン近郊の場所は喜びの谷(フロチンタル)と名付けられ、その傍には未だにこの名の館がある。更に未だに丸屋根の天蓋の付いた三人が眠れる緑色に塗られた寝台が見られるし、トンナ城(10)にはかのサラセン女性のトルコ(11)の巻頭巾(ターバン)と黄金の十字架がある。彼女が舗石を敷かせた城郭への路は今日に至るまでトルコ人路(テュルケンツェーク)と言われている。キルヒベルクの城代一家はアイゼナハ近郊の城郭であるファレンローデ(12)にこの物語が織り込まれている古い綴れ織りを所有している。エアフルトのペテロ(ペーター)の御山(スベルク)にこの三人の夫妻が埋葬されており、彼らの肖像が墓石に刻まれている(フランケンシュタイン著す『ノルドガウイェンス*年代記』に版画が見られる)(13)。

〔11〕

グライヒエン伯爵伝説の発祥についていくらか解説する。

一四五〇年に成立したフランスの韻文物語『ジリオン・ド・トラゼニ』(14)はグライヒエン伝説にかなり似ている。ジリオンは聖地からの帰途(とち)囚われの身となる。エジプトの王(スルケン)の息女グラシエンヌ(15)は彼を牢獄から解き放ち、父王

の宮廷で高位に就けてやる。ジリオンは奥方マリに貞節を守っていたが、妻が死んだ、との誤報を受けて王女と結婚する。彼を救おうと旅に出た息子たちから彼は真実を聞き知る。サラセン女性は、自分はジリオンと離婚するつもりはないが、最初の妻の端女はしためになろう、と言う。これに感動した奥方は夫を諦め、妻たちは二人ながら修道院に入る。伯爵は最初彼女たちの例に倣うが、やがて、戦に巻き込まれた王スルタンの救援に赴き、異国で殞たおれる。彼の心臓は二人の妻の間に埋葬される。

作者はル・エーノーの橄欖オリーブ修道院(19)にある墓碑を引き合いに出している。

しかし、これがグライヒェン伝説の前身とは断じられないであろう。前者は感傷的で暗いが、後者は楽天的で明るい。むしろ、後者の方が古い、と言ってもよいかも知れない。それにドイツの物語が、エアフルトの大聖堂にある奇妙な墓碑に影響されて、独自にテューリンゲンの山地で生まれたことを否定する理由は何も無い。あの墓碑は多分二度（しかし同時にではなく）結婚した伯爵のものであろう。後世その解釈に空想が尾鰭を付けてまことしやかな物語を作り出し、それが民衆の間に広まったとしても不思議は無い。

なお、イスラム教徒の王女メラツサ(20)がボヘムント(21)という名の虜囚の命を救い、自由にした、との中世の史家たちが記している、とのこと。これから伝説にスルタン王の息女が登場することになったか。

ヘッセンのフィリップ寛容方伯(22)が、彼とマルガレーテ・フォン・デア・ザール(23)との結婚を承認するようルター(24)とメランヒトン(25)に勧めた、とされるマルティン・ブツァー(26)に発した訓令（一五三九）は、十六世紀の最初の四半期に既にこの伝説が広まっていたこと、また、この伝説がジリオン・ド・トラゼニの伝説に依存しているのではないことを証明するために重要な意義を持つ。関係箇所はこうである。「また、殿下がこれにとりわけ重きをおかるにはあらざれども、聖墓に赴き、奥方死せり、と聞き知りて、かるがゆえに別の女性を娶りたるグライヒェン伯爵なる人物に、

二人を傍らに留むるも差し支えなし、と教皇自身認可したりしぞ⁽²⁷⁾。

かくしてこの頃から十七世紀にかけて数多くグライヒエン伯爵の伝説が記される。伯爵の名はしばしばルートヴィヒだが、エルンストとなっていることもある。また、オスマン・トルコのヨーロッパ侵攻が恐怖の的だった時代なので、伯爵が十字軍に参加して聖地に赴くのではなく、対トルコ戦に出征するという設定もある。

[四]

十六、十七世紀にはグライヒエン伯爵伝説を素材とした戯曲が少なからず作られたが、これらに言及するのはひとまず措き、十七世紀末から十八世紀半ばの時代における創作を俯瞰する。ただし、その文学的価値には触れない。

クリステイアン・ホーフマン・フォン・ホーフマンスヴァルダウ『グライヒエン伯爵ルートヴィヒとあるマホメツト教徒の女性との恋』⁽²⁸⁾は書簡体叙事詩の一つとして一六七九年ライプツィヒとブレスラウで出版された。

十七世紀末出版の、ル・ノーブル^{ムッレユク⁽²⁹⁾}氏なる人物が著したフランスの小説『ズリーマあるいは純愛。歴史小説』⁽³⁰⁾は、グライヒエン伝説の翻案とでも言うべき作品である。著者の主張するところによれば、物語の主人公であるヴェストファーレン公の流れを引くグライヒエン家の文書に題材を借りた、とのこと。この君侯エーバーハルトは⁽³¹⁾王ノラディン⁽³²⁾に対する戦役に出征、ヨッパの会戦で捕虜となり、⁽³³⁾王の寵臣ムスタファに⁽³⁴⁾奴隷として与えられる。命運をともにした小姓エヴァリス⁽³⁵⁾は王の息女ズリーマに⁽³⁶⁾主君の身分を明かす。エーバーハルトは勿論既婚者で、奥方のレオノーレ⁽³⁷⁾は彼に随いて十字軍に参加したのだが、船の難破で行方不明となっている。エーバーハルトは妻が亡くなったと思わざるを得ないが、それでもズリーマの求愛を毅然として退ける。この行為は報われる。彼はやがて、レオノーレがズリーマの友フェデイメの⁽³⁸⁾女奴隷となっているのを発見するのである。ノラディンは息女をムスタファと結婚さ

せようとする。しかしズリーマはムスタファを愛していないので、ヴェストファーレン公夫妻とともに船でヨーロッパに脱出する。ムスタファはフェディメと結婚、ズリーマを失ったことの慰めとする。ズリーマはキリスト教に改宗、エーバーハルトの友としてその所領に随いて行く。レオノーレがほどなく死ぬと、彼女がこれに代わる。

著者はどういう人物か不明だが、一七二五年初版、一七三〇年再版、改訂の無い三版が一七四四年に出た物語がある。その扉に記されているのは以下の通り。「グライヒェン伯爵ルートヴィヒの珍奇なる冒険譚^{アヴァンテュール}。同人が約束の地〔カナン〕への十字軍に加わり、サラセン人の手に落ちて虜囚^{とりこ}となり、サラセン女性の助けにて捕われの身から解放され、再びドイツなる元の妻の許に帰りつき、世を終わるまで二人の妻と添い遂げし次第。典雅にして教訓に満ちたる物語に書き上げたるはウエルラミウス。版元カール・ヴィルヘルム・フルデン。シュネーベルク、一七三〇年」⁽⁴¹⁾。

一七六九年ハンブルクとブレーメン⁽⁴²⁾で出版されたヨハン・フリードリヒ・レーヴェン『民謡調譚詩』⁽⁴³⁾の中に「十字軍遠征の最中サラセン人に捕われ、王^{スルタン}の息女によって自由の身とされしグライヒェン伯爵ルーデヴィヒの真実の物語。ならびに恋に燃えたるかかる釈放の理由⁽⁴⁴⁾」と題された詩がある。これは滑稽な民謡調譚詩の一つである。

〔四〕

ムゼーウスと同時代の文学作品で、この伝説を作者が用いているものに、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ⁽⁴⁵⁾の戯曲『シユテラ』五幕がある。これは軍人フェルナンドが貞淑なチエーリエと結婚、娘ルーチエをもうけたにも関わらず、どうしようもない衝動に突き動かされて失踪。その後あどけない乙女シユテラとも同棲した挙句、同じ理由からか、あるいは捨てた妻子と再会しようとしてか、なんともわけの分からぬ状況で再び出奔。数年経って孤児を守っているシユテラの邸へ戻って来たところを、人に騙されて財産を失い、シユテラの許で奉公することになっ

た娘ルーチエをとめない、この地へやって来たチエチーリエに遭遇する物語である。ただし、伝説がはつきり引用され、フェルナンドを説得するチエチーリエの情熱溢れる科白という形で紹介されているのは一七七六年の初稿においてのみ。その表題も『シユテラ、愛する人たちのための戯曲』⁽⁴⁸⁾となっていた。愛する二人の女性の間に挟まれ苦悩する男性が、ここではグライヒエン伯爵同様幸せな大団円を迎えることを示唆して幕が降りる。しかし、こうした結末は倫理的立場から批難を浴び、ハンブルクでは上演を禁じられたほど。だが、倫理うんぬんはともかくとしても、男を常に駆り立てて止まぬ魔的な力を本来の主題としてこの戯曲にあつては、両手に花の二人妻という解決は安易な妥協、一時の安心の約束に過ぎず、なんとも奇妙な印象を禁じ得ない。これでは、そうでなくとも誠実一筋のグライヒエン伯爵とは懸け離れた性格の主人公フェルナンドが、ひたむきな女心を弄ぶ低劣な悪党に過ぎなくなってしまう。従つてゲーテは一八〇六年ヴァイマルでの上演に際して、伝説の使用は完全に取り止め、主人公フェルナンドを自殺させ、更に一八一六年の改訂では、二人の女性の片方、若いシユテラが毒を仰ぐことにした。もっともそう変えたところで到底納得の行く解決とは申せない。つまるところこの市民悲劇は失敗作だった。

とは申せ、一七七六年には既に、詩（たとえば「ゼーゼンハイムの詩」）でも、小説（たとえば『若きヴェルターの悩み』）でも、戯曲（たとえば『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』『クラヴィーゴ』）でも伝統の革新者として、青年たちの叫びの代弁者として文学界にその存在を確立していたゲーテが、その戯曲に登場させたために、グライヒエン伯爵の伝説は再び照明を当てられた。

まず同年、グライヒエン伯爵を主人公とする民衆本が新たに出版された、⁽⁴⁹⁾という。

戯曲家ルートヴィヒ・フィリップ・ハーンは歌劇と銘打って『ジークフリート』⁽⁵⁰⁾なる芝居を物した。粗筋はざっとかくのごとし。

引き揚げて行くトルコ軍の勝鬨で幕が開く。ジークフリート伯爵が虜囚としてトルコ皇帝の前に。彼は自らの素性を明かさず、戦が始まる前は農夫だった、と言ひ張り、奴隷とされる。奴隷名はザーデ⁽⁵³⁾。庭で宰相⁽⁵⁴⁾の息女ズリーマとその女奴隷フライイーデ⁽⁵⁶⁾がザーデを見て、気に入る。突然奴隷たちの叛乱が起きる。ジークフリートは急いで奴隷監督を助けようとするが、間に合わない。彼は自らの身を守るために、倒れた監督の剣を手につけて闘うが、結局逃げなければならなくなる。現場に駆けつけた宰相⁽⁵⁵⁾は彼を、監督の殺害者で叛乱の一味徒党だ、と思ひ込み、塔に投獄させる。イスラム教徒の男性に変装したフライイーデがそこで彼を見つけるが、死刑の判決を受けた、と聞き、気絶する。悲しむジークフリートは故郷の妻マテイルデ⁽⁵⁷⁾を偲んでいるが、息を吹き返したフライイーデの愛の告白に驚愕する。牢番を買収しようとするフライイーデの計画は失敗、宰相⁽⁵⁸⁾は、ザーデを助命してください、との娘とその女奴隷の嘆願を聞き入れない。フライイーデは迅速な行動を取ろう、と考え、牢番の監視の裏をかくことに成功、ジークフリートとともに変装してヨーロッパに逃れる。ヨーロッパで二人はジークフリートの奥方が夫を悼んで巡礼に身を窶^{やつ}しているに出逢う。ジークフリートはこれを男性の隠者だと思ひ、大罪を犯した、と懺悔する。マテイルデはすぐに相手が夫であると分かり、女性の連れは何者なのか、と詮議する。彼女は真実を聞かされて最初は激怒したものの、すぐ気持ちとを和ませ、フライイーデを抱き締める。「彼はあなたのものよ、そう、私のもので、同時にあなたのものよ⁽⁵⁹⁾」と言つて。

トルコ皇帝⁽⁶⁰⁾は最初の登場以外、筋の進行に何一つ関わらない。一方女奴隷フライイーデは大活躍。しかし、なぜ彼女が伯爵を熱愛するのか。ズリーマこそ宰相⁽⁶¹⁾の息女で、これが伯爵の恋人のはず。はてさて、こちらはどのような。伯爵夫人マテイルデが巡礼の扮装をし、戻つて来た夫に、懺悔を果たすに相応しい隠者だ、と誤解されるに至るまでには一体どういう顛末⁽⁶²⁾があつたのか。もしかしてマテイルデはエルサレムなる聖墓へ参拝するつもりでいたの

か。そもそも伯爵は奴隷の叛乱に際して、なぜ敵側の味方をしたのか。これらについては説明が無い。

〔五〕

次に紹介する譚詩はムゼーウスが「メレクザーラ」を書くに当たって大きな影響を与えたのではないか、と思われる。

シュトールベルク⁽⁵⁹⁾シュトールベルク伯爵フリードリヒ・レオポルトの『グライヒェン伯爵の譚詩』⁽⁶⁰⁾がそれ。これは一七八二年に刊行されたが、その諧謔味溢れる筋立てはゲーテの『シユテラ』の深刻さとは無縁なので、もしかすると後者が発表された一七七六年以前に書かれたものかも知れない。

ムゼーウスの大嫌いな手合いの一人であつたらう疾風怒涛運動の闘士ハーンの噴飯物の熱狂的芝居とは打って変わった静謐な小品である点、『シユテラ』と没交渉な点、詩句が晴朗にして素朴な点、等等が大いにムゼーウスの琴線に触れ、ために彼がこれを素材にいつか一編の物語を書き上げたい、と胸中鬱勃となつた。——こう想像してみた。

その語り出しはこんな具合。

この日我、聖なる豎琴を手より措き、

鳴り響く弦を張りたるは、

唄と昔話の七弦琴なりき。

唄を歌い、昔話を語るには小型の七弦琴が伴奏楽器として相應しい。このさりげなき、軽やかさ、そして「昔話」という言葉は、(ムゼーウスが読んだ、とすればだが) ムゼーウスの心と目を充分に惹き付けたであろう。いかにも譚詩らしく物語は十字軍への参加を促す教皇の呼び掛けから始まる。グライヒェン伯爵はこれに従い、奥方に別れを告げて、戦の庭に赴く。

同勢果敢に聖墓を得んと、

割礼の子らを夥しく鞍の上より撃ち落とす、

ヨルダンの流れを屍で蔽いぬ。

しかし伯爵は敵軍に捕われ、教主の御前に連行される。教主は彼に、石竹と百合の世話をしよう命じる。庭園で働く彼は、そこで王の息女セリーナと知り合い、彼女の典雅な美しさに魅惑されるが、さしあたっては故郷に残した妻を偲び、恋心など起こさないでいる。けれどもセリーナの方は再三庭園で伯爵を捜し出す。

しからば、という次第で、「ちと怪しからぬ仕儀と存ずるが」、こちらはキリスト教という大義名分に拠って立つ。

しかして騎士は、姫君に聖なる真理を教えむ、と、

貴き決意を固めたり。

甘き言葉や目配せや、はた接吻を便りにて。

姫をキリスト教に改宗させるのに成功すると、今度は逃亡を考えるようになる。除去せねばならぬ障害はただ一つ。

さて思案は外ならず。騎士と連れ立ちこの愛らしき子が、
処女のままたて逃げられようか。

そこで伯爵は姫君と結婚、追っ手から逃れて無事故国に到着する。奥方は、愛する夫が異国で戦没した、と思いい、喪服を纏っている。全てを打ち明けられた彼女は、夫を救い出してくれた女性に向かつて、いみじくもこう語る。

さあ、王スルタンの息女殿。どうぞさらりと打ち解けて。

これから我ら三人で永久とこしえに愛し合ひましょう。

臥所ふしども墓ももろともとして。

このあとに続くのはカトリック教会に対する攻撃である。まだこの時期には作者シュトゥールベルク伯爵がカトリック教への改信を念頭に置いていなかったことがこれで分かる。僧侶たちはかんかん。「これでは世俗の者どもは、我らに堂堂胸張って、二人妻をば持つてである」と。彼らは司教に訴える。司教は好機到来とばかり、伯爵の贖罪の証あかしとしてその財産を要求する。しかし教皇はこの結婚に祝福を与え、三人は幸せな生涯を送る。教皇の特別認可を結婚の事後にしたのはシュトゥールベルクの細工である。この改変によりおそらく僧侶たちへの攻撃がより効果的になった。

さてそれからというものは、年毎二人子を授かりぬ。

やがて齡が伯爵の頭を銀髪で覆うまで。

そして夫が身罷れば、

ほどなく妻らも跡を追う。

かくして夫は臥所の裡で二人と共寐をせしごとく、

墓でも二人の許に憩う。

更に『シュトールベルク伯爵兄弟全集』の編纂者はこう注記している由。

「この詩情豊かなお伽話は歴史的な物語とさして隔たつてはいない。現在なお墳墓に刻まれている墓碑銘さえ結びの節と文字通りびたりと一致する。すなわち、

二人妻は我を夫として愛し、互いを姉妹と愛したり。

一人は我に従いて、イスラム教典を棄てたりき。

一人はまたさればとて我を捨てむとなさざりき。

一つ臥所がこの我ら三人を容れしあの日日のごと、

一つ奥津城にこの我ら三人を抱かしめむことを。」と。

ただし、墓碑銘の作者が何人^{なんびと}で、この墓がいずこにあるかについては、言及されていないような。

〔六〕

そしてこれが発表されたのとはほぼ同時期に、ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウスはイルム河畔⁽¹⁰⁾の彼の園亭^{おんてい}で『ドイツ人の民話』の執筆にいそしんだ。十四話を集めたこの物語集は、一七八二—八六年、五分冊の形を取ってゴータ⁽¹¹⁾で出版された。「メレクザーラ」はその第五分冊に「宝探し」「誘拐^{かどわかし}——ある逸話」とともに収められている。

解題注

(1) ジョゼフ・ピットン・ド・トゥルヌフォール (一六五八—一七〇八) の『王命により行われた近東^{レヴァント}旅行見聞録』 Joseph Pitton de Tournfort: *Relation d'un voyage du Levant, fait par ordre du Roy*. 1717.

(2) 民衆本^{フォルクスビューヒャー} 複数形「フォルクスビューヒャー」Volsbücher. 大抵は書肆を通じて売り捌^{さば}かれるのではなく、見本市^{メッセ}や歳^{ヤール}の市^{マルクト}で行商人の手によって頒布され、下層の民衆の娯楽に供された安い本。これらの本多くは中世後期あたりが起源で、十五世紀にフランス語から翻訳されり、翻案されたりした騎士物語やメルジーネ伝説の散文版である。『角あるザイフリート』〔沈黙の恋〕訳注参照)、『エルンスト公』などの民衆本は、ドイツの英雄伝説や吟遊詩人の詩歌のたぐいがその材料。フランスの伝奇文学^{ロマンス}は、『フォルトウナートとその息子たち』(既知の最古の版は一五〇九)、『皇帝オクタヴィアヌス』(一五二五)、『ハイモンの四人の子どもたち』(一五三五)、『麗しのマゲローネ』となった。純粹にドイツ種の民衆本としては、『テイル・オイレンシュピーゲル』『ファウスト博士』『シルタの市民たち』(これは愚か者をからかった笑い話)が挙げられよう。『ファルツ伯爵夫人ゲノフェーファ』を女主人公としたものは最も新しい民衆本かも知れない。十七世紀になると民衆本は度重なる改変・歪曲を蒙り、有識者層からは軽視された。それらの不朽の文学的内容を再認識したのはロマン派の作家たちで、ヨーゼフ・ゲレス Joseph Görres (一七七六—一八四八) はその著作『ドイツの民衆本』*Die teutschen Volksbücher* (一八〇七) で、ルートヴィヒ・ティーク Ludwig Tieck (一七七三—一八五三) は『麗しのマゲローネ』を再話し、『フォルトウナート』『ゲノフェーファ』および『皇帝オクタヴィアヌス』を戯曲化して、とりわけまたグスタフ・シュヴァープ Gustav Schwab (一七九二—一八五〇) はその理解に満ちた『ドイツ民衆本』*Deutsche Volksbücher* (一八三六) の編纂で、民衆本の価値を広く世間一般に承認させた。ドイツ学者でもあったカール・ジムロック Karl

- (14) フランケンシユタイン著す『ノルドガウイェンス*年代記』に版画が見られる gestochen in Frankensteins Annal nordgavens. 英語訳 (Edited and translated by Donald Ward: *The German Legends of the Brothers Grimm*. 2 vols. A Publication of the Institute for the Study of Human Issues, Philadelphia, 1981.) どのまま踏襲されている。グリムの注記にある nordgavens の最後の終止符は略語の印であるから、訳語では「*」を附しておいた。ところでムゼーウスは「この墓碑の銅版画はフォン・ファルケンシユタイン著す『ノルドガウイェンスイプス選集』に見られる」Ein Kupferstich von diesem Leichenstein, befindet sich in von Falkensteins analectis nordgavensibus と明記している。「メレクザーラ」訳注「フォン・ファルケンシユタイン」および『ノルドガウイェンスイプス選集』をも参照のこと。グリムがムゼーウスの原注を引き写し、しかもその際二重に誤記した、と解釈できないだろうか。ただし、伝説が記されるのは「選集」よりも「年代記」の方が相応しい、とは思わうが。
- (15) 解説 以下の記事は資料面において、未公刊ながら、エバーハルト・ザウアーの博士号請求論文「ドイツ文学におけるグラライヒェン伯爵の伝説」(一九一) Eberhard Sauer: Inaugural-Dissertation der Philosophischen Fakultät der Kaiser-Wilhelms-Universität in Straßburg: *Die Sage vom Grafen von Gleichen in der deutschen Literatur*. Straßburg 1911. に全面的に依拠したところをお断りしておく。もとよりの論文には出典その他がきちんと脚注に記されているが、この解題においてはかなり省略した。
- (16) 『シリオン・ド・トラゼニ』 Gillion de Trazegnies. 極めて著名なフランスの文献学者ガストン・パリス(一八三九—一九〇三)著『中世の詩歌』(一八八五。二卷) Gaston Paris: *La poésie du moyen-âge* およびアルフォンス・バヨの論文「シリオン・ド・トラゼニの物語」Alphons Bayot: *Le roman de Gillion de Trazegnies*. 紹介されている由。
- (17) グラシエンヌ Gracienne. アラビア風名称にしよう、との努力は払われていない。
- (18) マリ Marie.
- (19) ル・エーノの キエフ 橄欖修道院 Kloster Olive im Hennegau. ル・エーノは一部はベルギー、一部はフランスにまたがる地方。フラマン語ではヘネガウ Henegouw. 昔は伯爵領だった。
- (20) メラッサ Melassa. ムゼーウスが「メレクザーラ」という名を姫に与えたのは、これといくらか関係があるか。
- (21) ボヘムント Bohemund. ノルマン人で出自はノルマンディーの小貴族だったらしいが、イタリアのアプリア地方の支配者にまでのし上がったロベール、すなわちギスカール(奸諂公)と諱名された梟雄ロベール・ギスカール Robert Guiscard の長子にこの名の戦士がいる。フランス風にポーモン Boemund の方がより一般。一〇六五頃—一一一一年。彼は父の後妻の策略で父の地位を襲うことができず、イタリア半島南端の港町タレントの領主に甘んじざるを得なかったが、第一回十字軍に参加、一方の旗頭となり、シリアのアンティオキアを占有するに至った。

- (22) ヘッセンのフィリップ寛容方伯 Philipp der Großmütige Landgraf von Hessen. ヘッセン方伯フィリップ一世(一五〇四—一五六七)。一五二六年ヘッセンに新教を導入。マールブルク大学を創建したのもこの人。彼はルターとメランヒトンの同意を得て、一五二三年に結婚したクリスティーネ・フォン・ザクセン(一五四九没)がいるにも関わらず、一五四〇年マルガレーテ・フォン・デア・ザール(一五六六没)とも結婚した。
- (23) マルガレーテ・フォン・デア・ザール Margarethe von der Saal. 前掲注以外は未詳。
- (24) ルター Luther. マルティン・ルター Martin Luther (一四八三—一五六六)。ドイツにおける宗教改革の創始者。エアフルト大学で哲学を学ぶ。修士号を得てから父の希望で法学研究に向かった。しかしある時戸外で激しい雷雨に襲われ、落雷という畏怖すべき体験に遭い、アウグスティヌス派の修道院に入る。一五一〇年ローマを訪れ、帰国後ヴィッテンベルク大学の神学教授となる。一五二七年学問的論難を目的として、ヴィッテンベルクの城付き教会の扉にいわゆる「九十五箇条の意見書」を貼り出した。さしあたってルター自身にその意図は無かったものの、これはドイツにおける宗教改革の誘因となった。
- (25) メランヒトン Melancthon. フィリップ・メランヒトン Philipp Melancthon (一四九七—一五六〇)。Melancthon は元来の姓シユヴァルト エールト Schwarzerd (黒土)をギリシア風に変えたもの。宗教改革者。神学者。教育家。語学の才能に恵まれ、若くしてヘブライ語、ギリシア語、ラテン語などを習得。テュービンゲン大学に学ぶ。一五二八年ヴィッテンベルク大学ギリシア語教授となる。一五二九年以降は神学の授業も担当。ルターと急速に接近、一五二二年その影響下で最初の宗教改革教義学書『神学総論』*Loci communes rerum theologicarum* を著した。ルターを助けて、改革運動の精神を学問的に深めた、と言えよう。
- (26) フツァー Bucer. Butzer. とも。宗教改革者マルティン・フツァー(一四九二—一五五二)。一五二八年以降ルターを支持。
- (27) また、殿下が……教皇自身認可したりしや Item, wie wohl seine Fürstlichen Gnaden auf diese folgende nicht hoch geachtet, so hat der Papst selbst einen Grafen von Gleichen, welcher zum heiligen Grabe gewesen und in Erfahrung kommen (P.V), sein Weib sollte todt sein, deswegen er eine andere nahm, zugelassen, daß er sie beide mocht behalten.
- (28) クリステリアン・ホフマン・フォン・ホフマンズヴァルダウ 『グライヒェン伯爵ルートヴィヒとあるマホメット教徒の女性との恋』 Christian Hofmann von Hofmannswaldau: *Liebe zwischen Graf Ludwig von Gleichen und einer Mahometanin*. ホフマンズヴァルダウ(一六二七—一七一九)はシレジアの指導的立法家にして文人。シレジアの都市ブレスラウの市参事会員を経て市参事会座長。こうした非の打ち所の無い経歴とは裏腹に、巧緻な技巧の限りを尽くした官能的享楽主義的な韻文を著した。
- (29) ライプツィヒ Leipzig. この当時はザクセン選帝侯国に属す。その首邑ドレスデンとともに有数の商工業都市。スラヴ人の入植地としての起源は一〇〇〇年頃にまで遡る。ハレからシレジアへ、後にはニュルンベルクからポーランドへの通過貿易によって古くから栄え、既に十四

- 世紀^{ライプツィヒ}の^{ガール}見本^{モッセ}は名が高かった。
- (30) プレスラウ Breslau スラヴ人の入植地としての起源は一〇〇〇年頃にまで遡る。オーダー河畔のシレジアの都市。十一世紀にはポーランド王国領。やがてボヘミア王国に属し、この当時はオーストリアのハプスブルク家の支配下。現在ポーランド南西部の商工業都市ウロツワール Wroclaw。
- (31) ル・ノーブル 氏^{フナブル} M. Le Noble. 未詳。
- (32) 『ズリーマあるいは純愛。歴史小説』 *Zulima ou l'amour pur. Nouvelle Historique.* 一六九五年、パリでの出版。
- (33) ヴェストファールレン公 Prinz von Westfalen. ヴェストファールレンは元来ザクセン公国の西部地域の意。バイエルンとザクセンを支配していたハインリヒ獅子公(一一二九—九五)が神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ一世(赤髯王・帝(バルバロッサ))の権勢の前に敗れて一一八〇年追放刑を受けた時、独立の公国となった。その公権はケルンの大司教が掌握。後その大部分はヘッセン・ダルムシュタット方伯の手に移った。十九世紀初頭短期間ナポレオンの傀儡国家ヴェストファリア王国の構成要素になり、一八一五年プロイセン王国が継承。
- (34) エーバーハルト Eberhard. 古高ドイツ語で「牡猪 ebu || Eber + 不屈の hart || hart」というこの名はいかにもドイツの戦士に相応しい。
- (35) ノラディン Noradin. 十二世紀、エジプトとシリアの王となったクルドの英傑サラーフ・アッ・ディーンのヨーロッパ訛サラディンから思いついたのであろう。
- (36) ヨッパ Joppe. バレステイナの港湾都市ヤッファ Jaffa の古名。
- (37) ムスタファ Mustapha.
- (38) エヴァリスト Evariste. ドイツ風に読めばエヴァリストの表記の方が近いが、原典がフランス語であることを考慮した。
- (39) レオノーレ Leonore. E・ザウアーの原文通り。フランス風ならエレオノール Eleonore となろう。
- (40) フェディメ Fedime. アラビア風の女性名ファティマの訛か。
- (41) シュネーベルク Schneberg. ザクセンの小都市。
- (42) *Zuge nach dem gelobten Lande unter die Sarazenen als ein Gefangener gerathen, durch eine Sarazenerin aus der Gefangenschaft errettet, und bey seiner ersten Gemahlin wieder zu Teutschland ankommen auch mit beyden in Ehesand biss ans Ende. In einer amüßigen und lehrreichen Geschichte beschreiben, von Verlanio. Schneberg bey Carl Wilhelm Fulden 1730.*
著者を「ヴェラニウス」としたのは論者の考え。右の原題には Verlanio とある。
- (43) ハンブルク Hamburg. エルベ河下流の自由ハンザ都市。一五一〇年以降神聖ローマ帝国直属都市。ドイツ最大の港湾都市。ドイツ有数の大

商工業都市。現在ドイツ連邦州の一つ。

- (44) プレーメン Bremen. ヴェーザー河下流の自由ハンザ都市。かつての歴史については「沈黙の恋」訳注に詳しい。一六四六年以降公式には神聖ローマ帝国直属都市。ドイツ有数の大商工業都市。現在プレーマースハーフェン（六五キロ離れたヴェーザー河河口の海港）と合体してドイツ連邦州の一つ。

- (45) ヨーハン・フリードリヒ・レーヴェン 『民謡調譚詩』 Johann Friedrich Löwen: *Romanzen*. レーヴェン（一七二七—一七九二）は北ドイツで活躍した詩人。一七六七年ハンブルクの国民劇場創立に関与、(1)で上演される演劇の選定に当たった他、寸鉄詩ツンツェル、頌歌Preislied、歌曲Lied、滑稽詩Spottgedicht、物語Novelle、教訓詩、脚本などを書いた。

- (46) 十字軍遠征の最中……釈放の理由 *Die wahrhafte Geschichte des von den Sarazenen in den Kreuzzügen gefangenen und durch die Tochter des Sultans befreiten Graf Ludwing von Gleichen, samt den vertriehen Ursachen dieser Befreiung.*

- (47) ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe. このドイツの大文豪（一七四九—一八三二）の事績については、ことさら注を施す必要はなからう。ただ、一七三五年生まれのムゼーウスが十四歳年下の彼に対して、その最初の出逢いから自らの没年（一七八七）に至るまで、さして良い印象を持たずに終わったのではないか、との推測は記して置こう。二十代半ばのゲーテが一七七五年十一月、若いザクセン＝ヴァイマル公カール・アウグスト（一七五七—一八二八）の友人として、また、やがて公国の政治に参与する身（一七七六年七月カール・アウグストはゲーテを枢密閣議の一員に任命）としてこの国の宮廷に姿を現した時、ムゼーウスは初めて宮廷に出入りしてから既に八年にもなる先輩格で、しかも四十歳の中年だった。けれどもゲーテは、大学生活を送っていたストラスブル（一六八一—一八七〇）フランス領）で兄事したヨーハン・ゴットフリート・フォン（一八〇二以降）・ヘルダー（一七四四—一八〇三）——彼もヴァイマルの総教区監督兼宮廷牧師に就任する——ばかりか、ムゼーウスが大いに嫌っていた疾風怒涛運動Sturm und Drangの熱狂的推進者である、これまた若手の戯曲家ヤーコプ・ミヒャエル・ラインホルト・レンツ（一七五一—一九二）やフリードリヒ・マクシミリアン・フォン・クリンガー（一七五二—一八三二）まで引き連れる恰好で、颯爽と登場したわけである。善意の人、と言われるムゼーウスではあるが、内心甚だ穏やかでなかった、と忖度しても無理はあるまい。なるほど、レンツやクリンガーはその矯激な活動のため、翌七六年早くもヴァイマルから追放されてしまっし、ゲーテは、小邦とはいえその経営の一端に参画することによって現実の厳しさを体感するとともに、内面的に静かに後の古典主義へと向かい始めるのだが。ゲーテがヴァイマルを去ってイタリアへ赴くのは漸く一七八六年のこと。ヴァイマルに帰還するのは一七八八年六月。ムゼーウスは既に前年の十月世を去っている。

- (48) 『シユネテラ、愛する人たちのための戯曲』 *Stella, ein Schauspiel für Liebende.*

- (49) 市民悲劇 *bürgerliches Trauerspiel*. 従来の慣習を破り、王侯貴族の代わりに市民階級を主人公とした悲劇。ゴットホルト・エフライム・レ

ッシング（一七二九—一八一）の『ミス・サラ・サンブソン』Gothold Ephraim Lessing: *Miß Sarah Sampson*（一七五五）を先駆けとする。一見英国市民階級の家庭を舞台にしているようだが、そこに投影されているのは紛れもなくドイツ市民階級の意識である。二人の女性と一人の男性の葛藤を描いている点、これはゲーテの『シテラ』の原型と言えるかも知れない。

(50) まず同年……民衆本が新たに出版された 文学史家リヒアルト・マリーア・ヴェルナー Richard Maria Werner（一八五四—一九一三）が指摘しているとのこと。

(51) ルートヴィヒ・フィリップ・ハーン Ludwig Philipp Hahn. 疾風怒涛運動時代の戯曲家（一七四六—一八一四）。『ピサの叛乱』*Der Aufbruch zu Pisa*（一七七六）、『アーデルスベルク伯爵カール』*Graf Karl von Adelsberg*（一七七六）、『ローベルト・フォン・ホーエンエッケン』*Robert von Hohenecken*（一七八八）といった一連の極めて熱狂的な戯曲のために、一時的ではあるが、「シエクスピアのように」と讃嘆された。ゲーテの追隨者と申せよう。『ローベルト』はゲーテの『ゲッツ』に大いに影響されているそう。

(52) 『シークフリート』Siegfried *Siegfried, ein Singschauspiel*, Straburg 1779. 版元不明。

(53) ザーデ Zade. ル・ノーブル 氏の小説でも伯爵エーバーハルトの奴隸名はこれだそう。

(54) 宰相 Großweiser. ヴェジールは元来ベルシア語。「補佐者」の意。トルコ帝国の大臣。「グロース・ヴェジール」は「大いなる大臣」なので「宰相」。

(55) スリーマ Zuhma. これは勿論ル・ノーブル 氏の小説のタイトルでもあり、女主人公である王の息女の名。前掲のザーデオおよびこのスリーマから、ハーンがこの小説を読んでいることが類推される。

(56) フィライデー Philade. アラビア風の名としては何に当たるか未詳。

(57) マティルデ Mathilde.

(58) 彼はあなたのもので、私のもので、同時にあなたのもので Dein sey er. Dein, wie mein.

(59) シュトールベルク Stolberg. シュトールベルクはハルツ山地南麓にあるザクセンのかつての伯爵領で、主権は一八一五年プロイセン王国に移った。伯爵家はシュトールベルクⅡシュトールベルクとシュトールベルクⅢロースラの二系統。シュトールベルクⅡシュトールベルク伯爵家の城下町だったシュトールベルク・アム・ハルツは海拔三〇〇メートルにある保養地で、現在人口一四〇〇〇。今もなお美しい木骨家屋が多く、十三世紀起源を持つ城館がある。

(60) シュトールベルクⅡシュトールベルク伯爵フリードリヒ・レオポルトの『グライヒェン伯爵の譚詩』Friedrich Leopold, Graf zu Stolberg=*Stolberg, Ballade Graf Gleichen*.

フリードリヒ・レオポルト（一七五〇—一八一九）は兄である同じくシュトールベルクⅡシュトールベルク伯爵クリスティアン（一七四八—

一八二二)とともにドイツの小領邦で高級文官職を務めるとともに文筆に親しんだ。兄弟はそれぞれゲッティンゲン大学に学び、文学結社「林苑」(後の「ゲッティンゲン林苑同盟」)の成員となった。二人ながらゲーテやラヴァターとも親交を結ぶ。ゲーテとはスイス旅行(一七七五)に同行。フリードリヒ・レオポルトは抒情詩にも優れていたが、長編小説『島 Insel』(一七八八)や紀行『ドイツ、スイス、イタリヤおよびシチリア旅行記』*Eine Reise durch Deutschland, die Schweiz, Italien und Sizilien* (一七九四)もある。『イリアス』の翻訳(二七七八)やアイスキュロスの四つの悲劇の翻訳(一八〇二)は卓越した業績である。晩年の最も重要な仕事は『イエス・キリストの宗教の歴史』*Die Geschichte der Religion Jesu Christi* (一八〇六—一八〇八、十五卷)。彼の著作は『シュートルベルク伯爵兄弟全集』*Gesammelte Werke der Brüder Christian und Friedrich Leopold Grafen zu Stolberg* (一八二〇—二五、二十卷)の大部分を占めている。一八〇〇年家族とともに新教からカトリックに改宗したため、多くの知己、たとえばゲッティンゲン大学の同窓生かつ「林苑」における盟友で、彼と同様の分野で高い学問的業績を挙げた文人・文献学者ヨハン・ハインリヒ・フォスなどに非常に悪い心証を与えた。フォスは『いかにしてフリッツ・シュートルベルクは隷属者となりしか』*Wie ward Fritz Stolberg ein Ueifer* (一八一九)「フリッツ」はフリードリヒの愛称ないし蔑称だが、この場合フォスはもとより転向した友人を愛惜しているわけだから、友人としての愛称」を書いていく。しかしこれは一七八七年に物故したムゼーウスの与り知らぬこと。とにかくシュートルベルク・シュートルベルク伯爵フリードリヒ・レオポルトはムゼーウスの晩年時既に、若手ながらドイツ語圏でかなりの文名があり、ムゼーウスが充分に敬意を払う、あるいは少なくとも好意を感じるたぐいの人士であった、と言えよう。また、その生涯の業績を考えれば、十二分にそれに値した、と思われる。

(61) 割礼 男子の場合陰茎の包皮を環状に切除する習俗。古来エジプト人など諸民族に行われた。ユダヤ人もこれに従う。旧約聖書創世記に記事がある。ただしここで「割礼の子ら」というのはイスラム教徒を指す。

(62) ヨルダン Jordan. シリアに発して死海に注ぐ河。

(63) 教主 *Kalf*. アラビア語ハリーフア(「相統者」「代理者」)の訛。預言者ムハンマドの後継者を指す。政教一致のイスラム教共同体の最高権威者。とは言え、教主自らが十字軍と対峙した事実はない。また、名ばかりになった教主制度も、一二五八年アッバース朝教主が都にいたバクタードがモンゴル軍に破壊されるとともに終焉を迎えた。後エジプトの奴隸兵朝の王の一人がアッバース朝教主の後裔を首都カイロに招き、教主として擁立しはしたが。

(64) 石竹 *Nelke*. 撫子科の多年生草本。石竹は中国原産。別名唐撫子。高さ三〇センチ。五月紅、白、または雑色の花を咲かせる。南ヨーロッパ原産のものはカーネーション。石竹科の多年生草本。高さ三〇—一九〇センチ。夏夏紅、淡紅色、あるいは白の芳香ある花を咲かせる。別名オランダ石竹。

(65) 百合 *Lilie*. 百合科百合属の総称。多年生草本。石竹とともに何か寓意が籠められているのだろうか。

- (66) セリーナ Selina. これは到底アラビア風の名とは言えない。セレーネ Selene はギリシア神話の月の女神。
- (67) まだこの時期には……念頭に置いていなかったことが分かる。前掲注参照。
- (68) こう注記している由 E・ザウアーの論文に拠る。前掲注参照。
- (69) ^{アルコラ}イスラム教典 Akoran. イスラム教の基本的聖典『クルアーン』、俗称『コーラン』のこと。「アル」は本来アラビア語の定冠詞で、イスパニア語・ポルトガル語などから借入された他のヨーロッパ諸語の名詞の一部となっている。
- (70) イルム ^{III}ザレ河の左の支流。延長二二〇キロ。テューリンゲン ^{ヴァルト}森のシュネーコプフ山に源を発し、イルメナウで ^{ヴァルト}森を離れ、温泉療養地バート・ベルカとヴァイマルの傍ら流れ過ぎ、グロースヘーリンゲンでザレ河に合流する。
- (71) ゴータ Gota. テューリンゲンの都市。一八二五年までザクセン^{II}ゴータ公国、一八二六年コーブルクと統合され、ザクセン^{II}コーブルク^{II}ゴータ公国となったザクセン諸公国の一つ的首邑。ムゼーウスの住まうヴァイマル公国の首邑ヴァイマルとは直線で四〇数キロしか離れていない。